

I

[1] スウニオンから見た地中海、よりくわしくはエーゲ海は実に美しかった。それは青い海の映す白い光の交響曲だ。それはもう背後に何もかもかくしていない純粹現象の世界だ。神殿そのものも、崩れ、朽ちて、おもむろに、その中に帰って行く。運命はついに人間に克つように見える。パルテノンのフリーズの、最も男性的な容貌の中にも浮ぶ、この諦め、この苦しさ。なぜ、人間は運命から出発したのか。人間の営みも、やがて夜になれば、灰色の黄昏^{たそがれ}の中に沈む、この輝きと同じものではないだろうか。しかしそれが美しいことに変りない。これ以上問うことは無意味であろう。

森有正『バビロンの流れのほとりにて』より

[2] エーゲ海やギリシア本土を旅する者は、これはなにもギリシアに固有のことというわけではないが、ミノア人や古代ギリシア人の生の痕跡が今やほとんど自然そのものに帰ろうとしているのを目にし、その朽ちはてたすがたに、かえって深い感動を呼びさまされるという不思議な経験をするものだ。かつては栄え、今は塵に帰った人間たちの営みをわずかに証^{あか}しするものとしての遺跡が、それを取り囲んで広がる風景の内的・生命的部分となって、見る者の心の琴線に触れてくるのである。なかでもアポロンの聖所としてよく知られたデルフォイは、とりわけそうした風景の一典型と称して過言ではないように思う。

[3] デルフォイのアポロン神殿は、アテナイを含むギリシア中部・北部の諸ポリス（都市国家）の宗教連合（アンフィクティオニー）の中心聖所であったが、そこで授与された神託の名声は当時の地中海世界全域にとどろいていた。このデルフォイの神域は、ギリシア本土のほぼ中央に聳えるパルナッソス山（2457メートル）かのオリュンポス山に次ぐギリシアで二番目の高山、南麓の、海拔 600メートルの高地に位置している。アポロンの神域のま後ろには、これを取り囲むようにファイドリアデス（「光る岩」）と呼ばれる 250メートルから 300メートルにも達する岩壁が屹^{きつりつ}立していて、これを仰ぎ見る者に畏敬の念を呼びさます。そこから眼^{まなこ}をめぐらせば、眼下の谷間にはオリーブの林がつづき、その果てにコリントス湾の入江、さらにその向うにペロポネソス半島の山々が遠望される。いつ訪れても清冽^{せいれつ}な雰囲気^{たた}を湛えた風景である。

[4] アポロンの神苑そのものはこの見上げるような「光る岩」と奈落^{ならく}のように落ち込んだ渓谷の間の猫の額のような狭い急斜面を占めている。今は赤茶けた石灰石の、時の侵蝕^{しんしょく}を如実に示す数本の円柱だけが立つ紀元前 4 世紀のアポロン神殿、それでも比較的保存状態のよいヘレニズム期の野外円形劇場、外壁のみ復原されたアテナイ人の宝庫、ローマ時代のスタジアム、下手のアテナ女神の聖域の円堂^{トロス}と呼ばれる謎の大理石建造物、他には聖なる参道に沿って、古代ギリシア諸ポリスが競って寄進した宝庫の遺構が所狭しと並んでいる。あまりにも美しく畏怖すべき自然に辛うじて痕跡を留めている人間の営み、この瓦解した人間文化の夢の跡に佇^{たたず}

34 んでその雰囲気に身を浸す者は、人間は死すべき者なのだ、しかし人間はまさにそれ故にこそ
 35 人間なのだ、という思いに打たれるだろう。これこそギリシア的ヒューマニズムの質を規定し
 36 ている感覚である。

37 II

38 [5] 古代盛期のデルフォイに漲っていた息吹き、これを現代に再生させることはもとより不
 39 可能であるが、遺跡に佇んでありし日を想像するための一助となるものに、エウリピデスの悲
 40 劇『イオン』（紀元前 412 年頃）がある。これはデルフォイのアポロンの神域を舞台にした、ア
 41 ポロンの子イオン（イオニア族の始祖）の誕生の秘密をめぐるドラマである。ヘルメス神が語
 42 るプロローグが終ると、自分の出生の真実を知らないままアポロンの神殿に仕える若者イオン
 43 が、アポロンを彷彿させる姿で弓矢を背に月桂樹の若枝を携えて登場し、アポロンを讃美し、
 44 この神に身も心も捧げて仕える歓喜を次のように歌う。

45 四頭立ての馬車は燦然と輝く。
 46 日の神ははや大地を照らし、
 47 星々はこの高空の火を避け
 48 聖なる夜へと逃れ行く。
 49 人の踏み入ることなきパルナッソスの
 50 峯々はあかあかと照り映えて
 51 人々のため、日の車を迎える。

53 まことに尊いこの勤めを、
 54 おおアポロン、お宮の前に果すのは、
 55 神託の座をあがめるこの身。
 56 この勤めこそわが誉れ。
 57 死すべき者にではなく、
 58 不死なる神々に仕える故に。
 59 かくも栄えある勤めには
 60 決して倦み疲れることはない。

61 [6] ここにそのごく一部を訳出したイオンの独吟の歌は、デルフォイの朝のすがすがしさと溶
 62 けあって流れるアポロンの厳粛な靈気を少しく感じさせてくれよう。イオンは神域に標う清ら
 63 かな外気に触れて、彼の内側に歓喜の高まりくるのを覚えているのである。

64 [7] おそらく『イオン』よりさらに身近かに往時のデルフォイを偲ばせてくれるものは、こ
 65 の遺跡に隣接する博物館に展示されている青銅の御者像（紀元前 470 年頃）であろう。これは
 66 デルフォイのピューティア祭（アポロン祭）の戦車競技の勝者が、アポロンへの感謝の印とし
 67 て奉納したものであるが、長衣をまとして立つこの高貴な青年像の発する得も言われぬ
 68 静謐には、死すべき者にもごく稀な瞬間に与えられる輝かしい光、デルフォイの香気を感じ
 69 させるなものかが息づいている。ちょうどこの頃活躍した詩人ピンダロスの次の一節が想起

70 されよう。

71 移ろいやすき者ども 人はなにものであり、またなにものでないのか。
72 影うつろな夢ではないか。だが神よりの栄光が臨むとき、
73 まぶしい光が人々の上に留まり、生は歎ばしきものとなる。
74 『ピューティア第八祝勝歌』より

75 この凛々^{りり}しい青年像はそのような一条の光の差し込む一瞬を捉えたものと言えるのではなから
76 うか。

77 III

78 [8] すでに述べたように、アポロンの神域は屹立するファイドリアデスの岩壁に背後から取
79 り囲まれているために、デルフォイまで来ると、かえってバルナツソスの姿は隠されてしま
80 う。しかしデルフォイはこの聖山バルナツソスの存在と切り離しては考えられない。いやデル
81 フォイの風景を決定的に支配しているファイドリアデスの屏風^{びょうぶ}岩は、バルナツソス山系の一部
82 であり、まさにバルナツソスを本質的に代表している、と言ってよいであろう。

83 [9] パルナツソスは狂乱と陶酔の神ディオニュソスとその信女たちが徘徊^{はいかい}した恐ろしい聖山
84 であった。アポロンとムーサ（詩芸の女神ミューズ）たちの住む山と想像されるようになった
85 のは、ラテン詩人たちに歌われるようになってからのことである。ラファエロはじめルネッサ
86 ンス以降の芸術家たちによっても、しばしば牧歌的な緑の楽園として思い描かれたが、実際の
87 パルナツソスは灰色の岩肌も露^あらに荘嚴の気を漂わせた山岳である。こういうところにも、東
88 地中海の荒涼たる世界である現実のギリシアと、後代の西洋人が想像したギリシアー それは
89 しばしばローマ以北の肥沃なイタリアの風景であり、ローマの詩人オウィディウスの
90 『メタモルフォーセス
91 『変身物語』の世界であるとの歴然たる落差が見られる。その差異はギリシア語とラテン
92 語、ギリシア文学とラテン文学、さらに言えば、新約聖書の世界とカトリックの世界の差に対
93 応していると言ってよいであろう。

94 [10] それでは古代ギリシア人の意識の中では、ディオニュソスの聖山パルナツソスとアポロ
95 ンの聖域デルフォイは、どのように結びついていたのであろうか。ディオニュソスとアポロン
96 このふたりの別の神格が出会い、重なるところに、ギリシア的ヒューマニズムの内実が如実
97 に現れている、と考えられるのである。事実、デルフォイの神域自体ディオニュソスと無関係
98 ではなかった。11月はじめから2月はじめまでの3か月間、アポロンはデルフォイを去り、老
99 いも病いも知らないという、幸いなる極北のヒュペルボレオイ人の国に移り住む、と信じられ
100 ていた。その間デルフォイはディオニュソスの支配する聖域となったのである。

101 [11] このようなアポロン ラテン詩人オウィディウスの『メタモルフォーセス
102 『変身物語』をはじめとする、いわゆる「ギリシア神話」なる楽しいお話や、それらに取材した後代の絵画や彫刻に見る優美な
アポロンではなく、狂乱のディオニュソスの聖山パルナツソスを背景に持つデルフォイのアポ

103 ロン、ギリシアのアポロンは、いわば自らの内にディオニュソスを擁する奥行きを持った神
104 であった。ホメロスの叙事詩『イリアス』の冒頭で、アポロンはトロイア遠征のギリシア軍に
105 「夜のごとくに」現れ、悪疫をもたらす恐ろしい神として描かれている。しかし従来は、アポ
106 ロンと言えば、豎琴を手にする音楽や詩芸の守護神、あるいは快活な永遠の美青年のイメージ
107 で思い描かれるのが一般的であった。ニーチェが有名な『悲劇の誕生』で、「ディオニュソス的」
108 なるものの対立概念として「アポロンの」ということを言った影響で、アポロンを単純に明晰
109 な光の神、あるいは造形化する力の神格化と考えがちであった。そのような固定的なアポロン
110 像を打ち破るのに、『イリアス』冒頭の疫病をもたらす「夜のごとき」アポロンは十分に衝撃的
111 である。しかし一方では、この同じ神が「フォイボス・アポロン」と呼ばれているのである。「フ
112 ォイボス」とは一般に「光り輝くもの」の意とされている。それ故、ニーチェが描いた光の神、
113 明晰な精神としてのアポロン像も、もちろんこの神の一面は言い当てていたのである。要する
114 にアポロンは、光と闇の両面を内包する、それ故にこそ生きたリアルな神格であった、と言え
115 るであろう。

116 [12] ところでデルフォイのアポロン神殿の^{プロナオス}前房に「汝自らを知れ」という警句が掲げられ
117 ていた、と伝えられている。これは「人よ、汝は死すべき者たるを自覚せよ。不死なる神のご
118 とくあらんとするなかれ」という意味であり、神託を伺うためにこの地を訪れた人々に向って
119 発せられたアポロンのメッセージであった。この格言は、人間がいよいよ人間の限界を超えよ
120 う、不死なる存在になろうとする衝動を抱くからこそ、意味を持つものであったろう。限界が
121 是とされるのは、それ自体においてではなく、限界を突破せんとする危機が感得されるときで
122 であろう。形が尊ばれるのは、そこに形が刻印されるべき溢れでる内実があるからであろう。そ
123 のように受けとられたときはじめて、この金言はアポロンの宗教性の定義と称してよいものとな
124 り、ひいては限界の中に崇高なるものを見出し、形あるものの中に美を求めるギリシア的人
125 間観、芸術観の端的な表現となるのである。

126 [13] アポロンはまた弓矢を持つ神として表象されることが多く、ホメロスでは「遠矢を射る
127 神」と呼ばれている。遠くから矢を射るとは、「距離」の象徴である。アポロンはその弓矢によ
128 って、死すべき分際を忘れて神に馴れ近づこうとする人間に死をもたらす、「隔たり」の神なの
129 である。弓から矢が放たれるとき、音を発することからも、さらにその形状からも弓は豎琴と
130 相通じている。アポロンはホメロス以来、豎琴を奏でる神、音楽を司る神でもあった。音楽の
131 持つ高度の様式性は、人間が自ら死すべき者たるを知る限界の自覚と内的に連関していると言
132 えよう。総じてアポロンは、人間に死という限界を突きつけることによって、まさに人間を人
133 間たらしめる神であった、と解されるであろう。デルフォイの遺跡に立つ者は、「アポロンの」
134 と名づける他はないこれら一切が、その風景の中に現象しているのを感じさせられるのである。

135

IV

136

[14] デルフォイは、元は「ピューター」と呼ばれ、ホメロスでは未だこの名で歌われている。

137

ピューターは元来は大地ガイアとその夫としてのポセイドン（「ポセイドン」は「大地の夫」の

138

意とされる）の聖所であつたらしい。ところがオリュポスの神アポロンが古き大地の神々より

139

デルフォイ（ピューター）の支配権を奪い取り、この地の新しい主となつたのである。その

140

経緯はおよそ次のように伝えられている。エーゲ海はキュクラデス諸島の中心に位置するデロ

141

ス島 「キュクラデス」とはデロス島を核に「^{キユクロス}円環」を成す島々の意である、この島で誕

142

生したアポロンは、父神ゼウスの知恵を伝える、すなわち、神託を授ける神となるべく、それ

143

にふさわしい場所を求めて各地を遍歴する。そしてついにパルナッソスの麓のグリサ（つまり

144

デルフォイ）に神殿を建てる決意を固め、その地を守護していたガイアの化身たる大蛇ピュー

145

トーンを退治する。そしてアポロンはテッサリア地方のテンペの渓谷に赴いて血の汚れを清め

146

てもらふ。のちに大蛇ピュートーンの殺害とテンペでの清めを記念して、ピューティア祭が創

147

設された、と。このようにアポロンは、元来大^{クトーン}地母神系の神々に属していた神託を受け継いだ

148

のであるが、神託のこの古い起源に由来する諸特徴は、それがアポロンのものとなつたのちも、

149

十分にそのすがたを留めていた。その一つは、神託を媒介するピューティアと呼ばれる^{みこ}巫女

150

の存在であり、50歳以上の土地の百姓女がその役割を務めた、と言われている。ピューティア

151

ーは神^{かみかか}憑りになって、曖昧な口調で口走った。それを祭司がホメロスの叙事詩で用いられたの

152

と同じヘクサメトロス（長短短六脚律）という韻律の詩文に移し変えて、神託伺いに来た参詣

153

者に伝えたのである。

154

[15] さて大蛇ピュートーン（あるいは大地ガイア）とアポロンの関係は、先に見たディオニ

155

ュソスとアポロンの関係と同じ構造を成している、と解することができるのではなからうか。

156

従来ディオニュソスは、ミュケナイ時代よりのちの比較的新しい時代に小アジア（アナトリア）

157

あるいはトラキアかギリシアに到来した神とされていたが、いわゆる線文字 B 粘土板（ミュ

158

ケナイ文書）の解読の結果、この神はミュケナイ時代にすでにギリシアで崇拜されていた、と

159

考えられるにいたつた。しかし歴史的由来はどうあれ、ディオニュソスは本質的に大^{クトーン}地系の神

160

であると言って差し支えないであろう。（ギリシア神話でディオニュソスの母とされるセメレは、

161

キュベレと同じく、元来はアナトリアの大地母神であつた、と考えられる。）いずれにせよ、従

162

来しばしば一方的に光と調和の神、理性と秩序の神とされてきたアポロンが、神憑りの陶醉状

163

態 これ自体ディオニュソス宗教の特質である に陥った老女を介して、その知恵を語る神で

164

あつたことは、注目に値しよう。

165

[16] 神託はピューティアーが口走る言葉ならぬ言葉はもちろん、祭司がヘクサメトロスの調

166

べで伝える詩文の形においても、しばしば曖昧で二義的に解釈できるものであつた。彼自身「謎

167 の人」「暗き人」と呼ばれた哲学者ヘラクレイトスも、「デルフォイに神託所を持つ主なる神は、
 168 露わに語ることも、また隠すこともせず、ただしるしによって指し示す」(断片 DK22B93)と
 169 語ったと伝えられている。神託を求めてデルフォイに来て、一層不可解な思いを抱いてこの地
 170 を後にした人も多かったであろう。しかし神託が多義的であったことによって、人間はかえっ
 171 て自由と主体性を保証されていた、と言えるのではなからうか。神の言葉が一義的であれば、
 172 人間はただそれに服する以外にはなかったであろう。謎の言葉は人間に解釈を促す。その挑戦
 173 にどのように応答するかは、人間の自由に任されている。人間は自分の判断とそれに基づく行
 174 動に責任を持たねばならないのである。

V

176 [17] ここでデルフォイの神託をめぐる興味深いエピソードをいくつか紹介しておこう。「歴史
 177 の父」と称せられるヘロドトスの『歴史』(紀元前5世紀)第一巻が伝えるところによれば、リ
 178 ユディア王国最後の王クロイソスは、デルフォイに莫大な財宝を奉納してアポロンの神託を求
 179 めた このこと自体、「大地のへそ」(つまり「世界の中心」と称されたデルフォイの国際的名
 180 声を窺^{うかが}わせる。それは新興のペルシアと戦うべきか、いなか、という問いであったが、そ
 181 れに対して神託は「ペルシアに出兵すれば大帝国を滅ぼすことになる」と答えた、という。
 182 それを受けてクロイソスはキュロスが率いるペルシア軍と戦うが、大敗北を喫する(「サルディ
 183 ス陥落」推定年代は紀元前547年)。「大帝国」とは実は自分の国リュディアであったのに、グ
 184 ロイソスはペルシアのことだと、アポロンの真意を取り違えた、というのである。

185 [18] クロイソスは実在の人物であったが、神話伝説に登場する人間では、オイディプスの生
 186 涯がアポロンの神託の謎とその隠された意味を考えさせる最も著しい例であろう。テーバイ王
 187 ライオスは、その子によって殺害される運命にあるとの神託を受ける。わが子が誕生すると、
 188 ライオスは羊飼いに命じて赤子をキタイロン山中に棄てさせるが、不憫^{ふびん}に感じた羊飼いが人手
 189 に渡してしまい、その子はコリントスの王子オイディプスとして成長を遂げる。青年オイディ
 190 プスは、コリントス王は実の父ではないとの噂を耳にして、その真偽を確かめるためにデルフ
 191 オイに赴く。アポロンは彼の問いには答えず、かえって彼は父を殺害し、母と交わるであろう
 192 との恐ろしい予言を聞かされるのである。神託の成就を恐れたオイディプスは、断じてコリン
 193 トスには帰らぬとの決意を固めて、パルナッソスの麓の道を辿り、生れ故郷のテーバイへと向
 194 う。時あたかもテーバイを後に神託伺いの途上にあつた父ライオスと、運命の三叉路^{さんさろ}で出会い、
 195 つまらない争いからその旅人を父と知らずに殺してしまう。そして王なきテーバイの救済者とな
 196 ったオイディプスは、新王に迎えられ、これも知らずして母イオカステの夫君となるのであ
 197 る。平和で繁栄した年月が流れ、ある日突然悪疫がテーバイを襲う ソフォクレスの悲劇『オ
 198 イディプス王』(紀元前429年頃)はここから始まる。神託によって、その疫病の原因が放置

199 されたままの先王ライオス殺害の汚れにあると知ったオイディプスは、早速犯人捜索に乗り出
200 すが、その結果自分の恐ろしい素姓を発見することになる。彼は両目を突いて放浪の旅に出る。

201 [19] オイディプスはこのようにその全生涯にわたってアポロンの神託によって振り回された
202 た男に見える。しかし ここで詳説は控えざるをえないが 少なくともソフォクレスが描いた
203 オイディプスは、単に運命を無気力に甘受しただけの人物ではなかった。犯人捜索の実行は彼
204 の決意に基づいていた。彼の素姓（真実）の発見は彼自身が望んで引き寄せたものであった。
205 オイディプスは定められた運命を自分の主体的な決断と行動で成就したと見るのできるの
206 である。その消息は、恐ろしい真実を発見した直後、顔面を血まみれにして現れたオイディプ
207 スとテーバイの長老たち（合唱隊）の間で交わされる次の問答に、よく示されている。

208 コロス いずれの^{ダイモン}神^{そその}が御身を唆^そかしたのか。
209 オイディプス それはアポロンだ、アポロンだ、友よ、
210 私のこの惨めな、みじめな苦難をもたらしたのは。
211 だが目を突いたのは他ならぬ不幸な私自身だ。

212 彼はここで彼の運命を導いたのがアポロンだと認めつつ、同時に目を突いたのはあくまでも彼
213 自身だと、自己の主体的な行為と責任を明言しているのである。ここに弱さに徹して真に力強
214 いオイディプス、今やアポロンと対峙^{たいじ}して揺がざるオイディプスが立っている。真実が明らか
215 になって、母にして妻なるイオカステは自殺を遂げるが、オイディプスは盲目の目で、つまり、
216 心の目で真実を凝視して生きつづける決意を固めたのである。それは、アポロンの神託の真実
217 であったこと 世界は偶然ではなく、真理の配剤下にあること を証^{あか}しする、アポロンの使徒
218 としての生涯を新たに生きはじめることを意味するものであった。

219 VI

220 [20] デルフォイのアポロンの神託との関わりでもう一人忘れてはならない歴史上の人物 ギ
221 リシア思想史上の巨人 は、かのソクラテスである。ソクラテスは「汝自らを知れ」とのアポ
222 ロンの警句と全生涯をかけて真摯に対決した人であった。プラトンの著^{あらわ}した『ソクラテスの
223 弁明』には次のようなエピソードが記^{しる}されている。ソクラテスを信奉するカイレフォンという
224 熱血漢がいて、デルフォイに行き、ソクラテス以上の知者はいるかと伺ったところ、誰もいな
225 いという答えを得た。自分は無知な人間だと思っていたソクラテスは、アポロンはこの謎で何
226 を言おうとしているのか、と訝^{いぶか}しく思い、この神託に対して反駁を試みようとして、世の知
227 者と称されている人々を訪ね歩いたのである。その結果彼は何を発見したか。彼も知者たちも
228 善について、あるいは美についてなにも知らない。ところが彼らはなにも知らないのに、あた
229 かも知っているかのように考えている。それに対して、彼ソクラテスはなにも知らないが、知
230 っているとも思っていない。実にその分だけ、自分の方が彼らより知者なのだ。ソクラテスは

231 この認識に至ったのである。このようにして、彼の意図に反して、アポロンの神託が正しかっ
232 たことを証明する結果になった、というのである。その間に彼はいわゆる知者たちを訪ね歩い
233 て、彼らの思うことと真実とは別であることを指摘していくことが、神への奉仕だと認識しは
234 じめる。自分はアポロンに仕える使徒だという自己理解を持つようになったのである。このよ
235 うにソクラテスの活動はデルフォイのアポロンと深く結びついていた。有名な「無知の知」と
236 称されるソクラテス哲学の根本は、「汝自らを知れ」を彼独自の仕方と解釈し直したものであっ
237 た。ソクラテスはそれを知識論ないし認識論的に受け取り直して、新しい地平を切り開いたの
238 である。

239 [21] 当時、紀元前 5 世紀のアテナイには、「ソフィスト」と呼ばれる、すなわち「知者」と称
240 される教師たちが活躍していて、青年たちにいかに立派な人間になるか、その知識を授けると
241 主張していた。ソフィストらの言う「立派な人間になる」とは、立身出世を遂げることに他な
242 らなかった。彼らはよい人間教育をすると請負っていたが、そもそも「よい」とは、つまり「善」
243 とは一体何か、そういった根本問題はついに彼らの関心事とはならなかったのである。同時に
244 「真」とは何か、「美」とは何か、そもそも「人間」とは何か、彼らはそのような人間存在の基
245 本に関わる問題を問うことはせず、便宜的に既成の知識の切り売りをしていたのである。それ
246 に対してソクラテスは、ソフィストたちに、あるいは政治家や悲劇詩人ら当時の文化人たちに、
247 あるいは若者たちに、そして自分自身に向って、まさにそのような問いを問いつづけたのであ
248 る。ソフィストに限らず、「真」とは、「善」とは、「人間」とはといったことは自分には解って
249 いるのだ、と言える人間がはたしているだろうか。すなわち、このような人生における最も単
250 純にして基本的な問いを前にしては、学者であれ、文化人であれ、学生であれ、実業家であれ、
251 男であれ、女であれ、誰も一人の人間として、死すべき人間として、全く同じ「無知」の地
252 平に立たされるであろう。そこでソクラテスは、自分はなにも知らないということ、しかしそ
253 のことだけは知っているということ、すなわち「無知の知」を彼の哲学の基礎に据えたのであ
254 る。しかしこれはいわゆる不可知論ではない。この「無知の知」は、神こそ、デルフォイのア
255 ポロンこそ真の知者である、という信念に裏打ちされていたからである。その神と相違して、
256 人間は無知なる者、それ故にこそ真の知を求め愛する者、すなわち、“ソフォス”(知者)では
257 なく、“フィロソフォス”(愛知者)であるというのが、ソクラテスの自己理解、人間理解であ
258 った。「哲学」とはギリシア語で“フィロソフィア”というが、“ソフィア”は「知」、
259 “フィロ”は、“フィリア”という友愛を典型とする「愛」である。つまり哲学とは元来「愛知」というこ
260 とであった。その愛はまた、“エロース”、情熱的な愛エロースと言い換えてもよいであろう。
261 プラトンの『饗宴』では、哲学が「美のイデア」を追求するエロースの道として描かれている。

262

VII

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

[22] ソクラテスは一般に西洋合理主義の祖の一人と見なされている。ソクラテス自身はなにも書き残さなかったが、弟子のプラトンが書いたソクラテスを主人公とする対話篇を通して知る限り、彼はまさに^{ロゴス}言論の人であった。彼のフィロソフィアの活動は問答活動とも呼ばれるが、彼は問答を通して、つまりロゴスによって、真理をどこまでも厳密に追求する人物であった。そしてそれ故に彼は人々に^{うと}疎まれ、あらぬ罪を着せられて毒杯を仰がされたのである。紀元前399年のことであった。しかしここで再度留意したいことは、このロゴスの人ソクラテスが実はその根本においてアポロンの神託というロゴスを超えるものに規定されていた、という逆説である。それだけでなく、ソクラテスは幼少の頃から“ダイモニオン”(“ダイモン”的なるもの)の経験、“ダイモン”の声を聞くという不思議な経験をしていたという。『ソクラテスの弁明』からその箇所(31c~d)を引用してみよう。

273

274

275

276

277

.....しかしこのことの原因は諸君が多くのところ私の話すのを聞いたところのもの、つまり私に現れてくる一種神的なもの、あるいはダイモンのものである。.....それは一種の声として現れてくるが、現れてくる時には、これから何でも私がしようとすることを、しないようにいつも気を変らせるが、するように勧めることはない。(山本光雄訳)

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

ダイモンはいつもこのように禁止的に現れた、というのである。ダイモンにせよ、運命にせよ、死にせよ、人間を超える絶対的なものは、人間に対していつも否定的に関わってくるものらしい。肯定的にではなく、否定的に働くからこそ、合理的なものとしてではなく非合理的な謎のようなものとして立ち現れてくるからこそ、人間はある意味で自由に主体的にそれに対することができるのではないか。ソクラテスに即して言えば、彼はロゴスの人として、ロゴス的思考によって真理をどこまでも追求することをやめなかった。その主体性があるからこそ、いわばその極限ではじめてダイモンの否定にも出会えたということではなからうか。言い換えれば、彼のロゴス的な営みはロゴスの内部に閉塞^{へいそく}してしまわず、ロゴスを超える世界に開かれていたのである。逆方向から見れば、ソクラテスにおいては、アポロンの神託なり、ダイモンのしるしなりの非理性的、あるいは宗教的経験こそが、彼のロゴス的、理性的な営みを支えていたのである。このことから明らかなごとく、ソクラテスは単なる合理主義の祖として捉えるだけではすまされない、合理と非合理、理性と非理性の緊張関係の中を生きぬいた人間であった、と解せよう。

291

VIII

292

293

294

[23] このような宗教的なものと哲学的なもの、神的なものと人間的なもの、非理性的なものと理性的なものとの間の、互いに開かれた関係は、ソクラテスに限らず、ギリシア文化の最も基本的な構造である、と見てよいであろう。デルフォイの遺跡にもその点が明瞭に現れている。

295 そこにはアポロンの神殿や奉納物殿のみならず、劇場やスタジアムやギムナジウム（体育練
296 習場）までも備わっていた。さらにこの聖域全体が芸術作品の展示場の観を呈していたのであ
297 る。すなわち、ここでは宗教は現実からの逃避を意味せず、むしろアポロンの聖域こそ市民共
298 同体の公的な文化の中心的な意義を担う空間であったのである。同様のことは、ギリシアの演
299 劇についても、文学についても、芸術についても、あるいはオリンピック競技のようなスポー
300 ツの祭典についても言える。総じてギリシア古典文化はきわめて宗教的でありつつ、同時に世
301 俗的・人間的であったのである。

302 [24] しかしこのようなギリシアの古典文化も、やがてそれを支えていたポリス共同体の崩壊
303 とともに、内側から瓦解していくことになる。ヘレニズム時代の到来である。そしてさらに時
304 を経て、ギリシアがローマ帝国の一版図に組み込まれたのち、周知の通り、イスラエル・ユダ
305 ヤの土壌から生まれたキリスト教の精神と邂逅かいこうすることになった。これは従来、西洋精神史に
306 おけるヘブライズムとヘレニズム、あるいは宗教と文化、信仰と理性の関係として論じられて
307 きたことに他ならない。ただ、ギリシアをギリシアに即して見直すとき、そのヒューマニズム
308 はそれなりに、死すべき人間の限界の自覚を踏まえた、深く宗教的な文化であったことが了解
309 されるのである。その消息がまさにデルフォイの風景にも現れ、またアポロン神殿に掲げられ
310 た警句「汝自らを知れ」にも端的に表現されていたのである。

参考文献

- 内田芳明、『風景の現象学 ヨーロッパの旅から』 中公新書、1985年
- 秋田稔ほか、『若き友へ 生きる意味を求めて』 ヨルダン社、1990年
- 川島重成、『ギリシア悲劇の人間理解』 新地書房、1983年
- 川島重成、『イーリアス ギリシア英雄叙事詩の世界』 岩波セミナーブックス、1991年
- ヘロドトス(松平千秋訳)『歴史』上 岩波文庫、1971年
- プラトン(山本光雄訳)『ソクラテスの弁明』 角川文庫、1954年
- ホメロス(伝)(逸見喜一郎、片山英男訳)『四つのギリシャ神話 『ホメーロス讃歌より』』、
岩波文庫、1985年

1. 資料の冒頭に引用した森有正の文章の 6 行目から 7 行目にかけて、「それが美しいことに変りない」とある。「それ」が指すものは次のどれか。
 - a. 人間の営み
 - b. 灰色の黄昏
 - c. この輝き
 - d. この諦め、この苦しさ

2. 著者が「風景」という言葉で考えているものはどれか。
 - a. 宗教的にして同時に人間的な感動を呼びさます自然
 - b. 人間の営みを包み込む自然
 - c. 見る者の心の琴線に触れてくる人間文化の痕跡
 - d. 自然そのものに帰ろうとしている生の営み

3. ファイドリアデスと無関係のものはどれか。
 - a. パルナッソスの姿を隠してしまう岩壁
 - b. デルフォイにおいてパルナッソスを代表するもの
 - c. 『イオン』の独吟の歌にうたわれている「パルナッソスの峯々」
 - d. 奈落のように落ち込んだ溪谷

4. ギリシア的ヒューマニズムの質を規定している感覚とはどれか。
 - a. 人は影うつろな夢と感じる心
 - b. 不死なる者になろうとする衝動
 - c. 限界の中に崇高なるものを見出す感性
 - d. 非合理・非理性的なものへの感受性

5. アポロン^{ゆかり}縁の地でないものはどれか。
 - a. デロス島
 - b. テンペの溪谷
 - c. ヒュペルボレオイ人の国
 - d. トラキア

6. デルフォイを訪れる人に「人間は死すべき者」だと感じさせるものはどれか。
- a. 時の侵蝕を如実に示す石柱
 - b. アポロンの神域に生えている月桂樹
 - c. アポロンの神域に漂う清らかな外気
 - d. 巫女の陥る神憑りの陶醉状態
7. 『イオン』についての記述として、不適当なものはどれか。
- a. イオンの内なる歓喜は、デルフォイの清らかな外気に呼応している。
 - b. アポロンに仕えるイオンの誉れは、アポロンの子としての自覚に基づいている。
 - c. イオンの独吟歌における「四頭立ての馬車」とは太陽を指す
 - d. イオンの独吟歌の「神託の座」とはアポロン神殿を指す。
8. パルナッソスについての記述として、不適当なものはどれか。
- a. 狂乱と陶醉の神ディオニュソスの聖山であった。
 - b. アポロンとミューズたちの住む聖山となったのは、ルネッサンス時代以降のことであった。
 - c. オリュンポスに次ぐギリシア第二の高山である。
 - d. その麓の道はオイディプス伝説に困む三叉路に通じていた。
9. 著者が青銅の御者像に注目する理由はどれか。
- a. アポロンのイメージを想起させるから。
 - b. 人間の移ろいやすさを感じさせるから。
 - c. 死すべき者にも与えられる栄光を感じさせるから。
 - d. 勝者の永遠の輝きをあらわしているから。
10. アポロンの神託についてふさわしくない記述はどれか。
- a. つねに否定的な表現で語られる。
 - b. 巫女と祭司を媒介として参詣者に伝えられる。
 - c. 大地母神系の神々から受け継がれた。
 - d. 神託はゼウスの知恵を示している。

11. クロイソスがアポロンの神託を伺った上でペルシア軍と戦い敗北した、というエピソードが含意するものとして、不適当なものはどれか。
- a. 人間の判断力の限界
 - b. 人間の自由と主体性
 - c. 神の言葉の不可解さ
 - d. 人間存在の空虚さ
12. 「遠矢を射る神」としてのアポロンによって象徴される「距離」とはどれか。
- a. アポロンのものとディオニュソスのものとの隔たり
 - b. 明晰な光の神と「夜のごとき」アポロンとの隔たり
 - c. 不死なる神と死すべき人間との隔たり
 - d. 悪疫をもたらす恐ろしい神と優美な神との隔たり
13. 著者の描くアポロン像として最もふさわしいものはどれか。
- a. 永遠の美青年
 - b. 明晰な光の神
 - c. 夜のごとき神
 - d. 光と闇を内包する神
14. 神託の成就を恐れたオイディプスがコリントスに帰らないという決意を固めた理由はどれか。
- a. 生まれ故郷のテーバイに帰って真実を確かめようとしたから。
 - b. コリントス王とその妃をあくまで実の父母であると思っていたから。
 - c. 神託によって自分の出生の秘密を知ったから。
 - d. 生まれ故郷に帰れば神託が無効になると考えたから。
15. ソクラテスと無関係のものはどれか。
- a. 無知の知
 - b. 「汝自らを知れ」
 - c. 不可知論
 - d. 問答活動

16. ソクラテスについて最もふさわしい説明はどれか。
- a. アポロンの神託を信じる非合理的な宗教的人間であった。
 - b. 問答活動によって人々に真理が認識不可能であることを教えた。
 - c. ダイモーンの否定によってロゴ斯的思考に目ざめた。
 - d. ロゴ斯的なものとは非ロゴ斯的なものとの緊張のうちに真理の追求をおこなった。
17. このエッセイを通じて著者が主張していることは、次のどれか。
- a. 合理的と見なされているギリシア人がじつは非合理的な民族であった。
 - b. ギリシアの古典文化をキリスト教の精神に基づいて見直さなければならない。
 - c. ギリシア文化は運命を克服した合理的精神の典型である。
 - d. ギリシア的ヒューマニズムは否定を内包した人間肯定の上に成り立っている。
18. このエッセイのタイトルとして最もふさわしいと考えられるのはどれか。
- a. 「汝自らを知れ」 デルフォイの風景をめぐる
 - b. デルフォイの風景 アポロンとディオニュソス
 - c. デルフォイの風景 ギリシア的ヒューマニズムの構造
 - d. クロイソス・オイディプス・ソクラテス アポロンの神託をめぐる

以下の問題には、相互に関連する二つの文章(1)と(2)が与えられています。筆者の考え方に照らして最も適当と思うものを、次のa, b, c, dの中から一つ選びなさい。

- a. (1)、(2)とも正しい。
 - b. (1)、(2)ともに間違っている。
 - c. (1)は正しいが、(2)は間違っている。
 - d. (1)は間違っているが、(2)は正しい。
- 19.
- (1) 後代の西洋人はしばしば、実際のギリシアを目にすることなく、ローマ以北のイタリアの風景をギリシアのそれとして思い描いた。
 - (2) 荒涼たる山岳であるパルナッソスと牧歌的な緑の楽園としてのパルナッソスの差は、カトリック的聖書世界とオウィディウスの『変身物語』的世界の差に等しい。
- 20.
- (1) ギリシア人の意識の中のアポロン像は、いわばディオニュソスを内包する神であった、と言える。
 - (2) デルフォイは冬の三か月間、ディオニュソスの聖域となった。

21.

- (1) ギリシア的ヒューマニズムは、宗教的にして、同時に世俗的・人間的文化であった。
- (2) ギリシア的ヒューマニズムは、アポロンの合理主義の限界を明示するディオニュソスの非合理精神と定義できる。

22.

- (1) ニーチェは、アポロンを明晰な光の神、造形化する力の神格化と考えた。
- (2) ニーチェは『悲劇の誕生』で、「アポロンの」なるものの対立概念として「ディオニュソスの」ということを言った。

23.

- (1) 『イリアス』に描かれる「夜のごとく」現れて疫病をもたらすアポロンとは、実際はディオニュソスを指している。
- (2) 『イリアス』に描かれる「フォイボス」アポロンとは、疫病をもたらす闇の力と対抗する光の力の神格化である。

24. デルフォイのアポロン神殿に掲げられていた「汝自らを知れ」の警句は、参詣者^{さんけい}に対して

- (1) 「無知の知」の自覚を促すアポロンのメッセージであった。
- (2) 「人間は死すべき者」の自覚を促すアポロンのメッセージであった。

25.

- (1) 「汝自らを知れ」の警句は、音楽の持つ高度の様式性と内的に連関している。
- (2) 「汝自らを知れ」の警句は、神に馴れ近づく人間に、死という限界を突きつけるアポロンの宗教性の表現である。

26.

- (1) デイオニュソスがクトーン系の神とされるのは、線文字 B 粘土版の解読の結果、この神がすでにミュケナイ時代にギリシアで崇拝されていた古い神であることが明らかになったからである。
- (2) デイオニュソスが、従来の説の通り、比較的新しい時代にアナトリアないしトラキアからギリシアに到来した神だとしても、クトーン系の神であることには変りはない。

27.

- (1) ピューティアーが神憑りの陶酔状態に陥るのは、ディオニュソスが乗り移っているからである。
- (2) ピューティアーの神憑りは、デルフォイの神託が元来クトーン系の神々に属していたことを暗示している。

28. 神託がしばしば曖昧で二義的であったことで、人間はかえって自由と主体性を保証された、とされているが、それは

- (1) 神託が、それを聞いた人間に自由な解釈を促したからである。
- (2) 人間はもはや神の言葉に服従する必要がなくなったからである。

29. オイディプス伝説において、赤子の殺害を命じられたにもかかわらず、不憫に感じて人手に渡した羊飼いの行為は、

- (1) アポロンによって、運命を成就させるための道具として用いられた、と解しうる。
- (2) 人間としての自由と主体性に基づくものであった、と解しうる。

30.

(1) オイディプス伝説における「運命の三叉路」とは、オイディプスが父ライオスと出会った場所としての三叉路を意味している。

(2) オイディプス伝説における「運命の三叉路」とはオイディプスがコリントスに帰るか、テーバイに行くか、それともデルフォイに行ってもう一度アポロンの真意を確かめるか、彼自身の運命をこの三通りに選択できる可能性のあったことを示唆する象徴的表現である。

31. 『オイディプス王』で、合唱隊がオイディプスに問いかけたセリフ、“いずれの^{ダイモン}神が御身を唆かしたのか”に対する応答（資料[19]参照）において、オイディプスは、

- (1) その^{ダイモン}神とはアポロンであると認めながらも、“目を突いたのは私自身”というセリフで、そのダイモン＝アポロンとは、実は彼自身である、との自己理解を示した。
- (2) 自ら苦難を引き受けることで、苦難をもたらしたアポロンを否定し、アポロンを超える真に力強い人間となった、との自己理解を示した。

32.

- (1) オイディプスが盲目になったことは、真実は肉眼には見えないことを暗示している。
- (2) オイディプスが盲目になったことは、ソクラテスの「無知の知」に通じる人間理解を示唆している。

33.

- (1) ソフォクレスは、全生涯にわたりアポロンの神託に振り回されたオイディプスが、同時に主体的な決断と行動によって彼自身の運命を成就した人間であった、と見ている。
- (2) ソフォクレスは、オイディプスがデルフォイで自ら聞いた、父を殺害し母と交わるであろう、との神託の故に、自分に定められた悲惨な運命を自覚的に引き受けた人間であった、と見ている。

34.

- (1) ソクラテスの「無知の知」は、「知への愛」としての哲学、すなわち、エロースの道に他ならない。
- (2) ソクラテスの「無知の知」は、「汝自らを知れ」を知識論ないし認識論の場で解釈し直したものである。

35. ソフィストたちは青年たちに、いかによい人間になるか、その知識を授けると主張していたが、

- (1) ソクラテスは“よい人間になる”ということの問題にすることが、そもそも神ならぬ人間には不可能だと考え、ソフィストたちの主張に反対した。
- (2) ソクラテスは、ソフィストたちが彼自身とは違って、“よい”とは一体何か、という根本問題を問うことなく、いきなり「無知の知」の立場に立っているとして、その主張に反対した。

36.

- (1) このエッセイの著者は、ソクラテスがもともと西洋合理主義思想とは無関係であった、と考えている。
- (2) このエッセイの著者は、ソクラテスが西洋における宗教的・神秘的思想の始祖である、と考えている。

37. このエッセイの著者は、オイディプスとソクラテスの双方を、“アポロンの使徒”と称しているが、

- (1) 盲目のオイディプスは、アポロンの真理を自分自身の姿そのもので証しする人間として、アポロンの使徒であった。
- (2) ソクラテスは、アポロンの真理をあくまでも自己を超えたところに求める愛知者として、アポロンの使徒であった。

38.

- (1) 著者の見解によれば、西洋精神史におけるヘブライズムとヘレニズムの関係は、帝政ローマ時代以降の現象である。
- (2) 著者の見解によれば、西洋精神史におけるヘブライズムとヘレニズムの関係に類比の関係は、すでに古代ギリシアのヒューマニズム自体の中に存在した。